甲斐の金山から　平成10年3月31日　第4号

資料館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡／湯之奥・中山金山

甲斐黄金村●湯之奥金山資料館報

資料館を公立博物館として登録

博物館法では、「博物館とは歴史、民俗、自然科学等に関する資料を収集、保管、展示して、教育的配慮の下に公衆の利用に供し、その教養を高めたり、調査研究に役立つ事業を行い、同時に、館としても、これらの資料に関する調査研究を行うことを目的とする施設である」、と規定しています。

湯之奥金山資料館は、この法の規定に沿うことから、県教育委員会に博物館登録を申請していたところ、3月31日付けで登録公示されたものです。

博物館法の根底にあるものは、社会教育法であることから、その精神に基づき、教育、学術及び文化の発展に寄与できるような資料館として、機能を充実させていく所存です。当館の博物館登録により、県下の登録博物館は17施設となりました。

「学際的」調査/考古学から

甲斐黄金村・湯之奥金山資料館 館長　谷　口　一　夫

考古学の発掘調査で得られる遺物の中には、使途不明なものも発見されます。中には用途は推定できるものの、厳密な意味でどのように使われたか不明なものもあります。

例えば、湯之奥／中山金山遺跡からは、写真のような石製品が調査時に1点、調査以前に1点発見されており、計2点ありますが、これが当初どのような用途で使われた道具なのか解りませんでした。

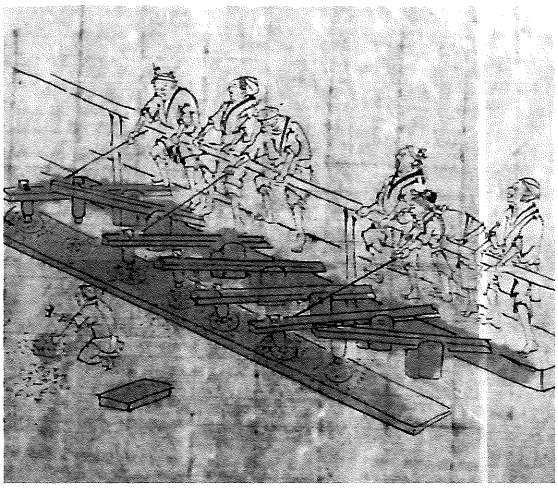
しかし、これは文献史料である絵図によって、その用途が明らかにされました。

湯之奥金山資料館建設に伴う調査活動の一端が読売新聞岩手版に紹介され、資料館だより第3号の5ページには、その記事をそのまま掲載していますが、ここで書かれている江戸時代の絵師佐々木藍田さんの「金沢御山大盛之図」からは、不明だった遺物の用途、使い方など克明に知ることができました。

佐々木藍田（文政6年／1823）さんから数えて五代目にあたる御子孫の佐々木正太郎さん宅（岩手県大槌町）には、絵師藍田さん直筆の作品が沢山残されていました。鳥、魚、花、人物、風景等あらゆるものに目が向けられていますが、いずれを見てもその繊細な観察力、表現力と作品の確かさから、絵図に描かれている「金生産工程」の内容の確かさを伺い知ることができました。

当然、湯之奥／中山金山遺跡は、15世紀～18世紀における金山ですから、初源期からこの姿をしていた訳ではありません。ですが、終末期には、絵図にあるような道具を使った金の生産工程があったということになります。

資料館だより第2号5ページに掲載されています「フネ」「セリ板」も、絵図（下）の中にしっかり出



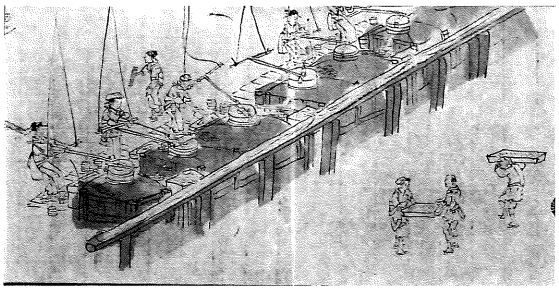
てきます。用途、使い方は一目瞭然です。

さて、冒頭で触れた石製品（写真）ですが、これも藍田さんの絵図（上）にしっかりと書かれていました。「搗き石」として鉱石を粉砕するのに使われたものでした。絵図からは足踏み式で使われていたことが解ります。

なお、静岡県の梅ケ島／安倍金山では、搗き石は有りませんが、搗き臼の存在は確認できています。

動力には水車が使われていたようです。

このように歴史事実である「遺物」が、文献史料である「絵図」と符号することで歴史史料としての史料的価値が「遺物」も「絵図」も高まっていくことになります。これも学際的研究の大きな特色といえます。（終）



活動報告　公開講座

昨年10月から６回シリーズで開いていた公開講座もいよいよ大詰めを迎え、２月８日に第５回講座を、また、３月８日に第６回講座を開催しました。

第５回講座は「武田氏と金山－その２」という演題のもと、講師に山梨県教育委員会県史編さん室主任の堀内　亨先生を迎え、講演していただきました。

堀内先生は、古文書からみた湯之奥金山、そして湯之奥という村について考えていこうという趣旨から内容を進めていき、遠い昔を現在の私たちに伝え得る「古文書」という文献の存在の重要性を強調しながら、当時の文献史料からどのようなことが言えるのか、文献は金山についてどの程度語れるのかという文献史学の視点から講演されました。そして一般民衆の直接の先祖に伝わる、例えば日記のようなものであっても決して蔑ろにできるものは何一つなく、すべてが大切であり、そこに考古学や民俗学など様々な学問が融合して、豊かな歴史像を作り上げるのではないかと語られました。

第６回講座はシリーズの最終回でもあり、講師には帝京大学山梨文化財研究所長である、当館の谷口一夫館長が、「今後の金山研究と資料館」という演題のもと、これまでの講演の経緯を述べるとともに、総括として講演されました。はじめに、過去の事実を知る方法として、「歴史史料とは何か」を４つ（遺物史料、文献史料、民俗史料、科学分析資料）に分け、それぞれの特徴と重要性を語り、そして過去においては文献史学の領域であった金山研究が、湯之奥中山金山遺跡で試みられた学際的調査によって、文献史学、考古学、民俗学などの切り口から文献のみでは解釈に限界があった部分が明らかになったと説明されました。

最後に資料館は、現在山梨県立博物館構想が策定されるなかで、そこと結び付いた専門資料館（金山研究の拠点）としてのあり方・位置付けが求められ、県立博物館を核とするハブ博物館の一つとしての充実が、下部町の発展にもつながっていくことを述べて締めくくられました。

悪天候に悩まされた公開講座も最終回は晴天に恵まれ、多くの方が聴講に来館してくださいました。

当館では今後もこのような講座や企画展等を開催しますので、御参加くださるようお願いいたします。

有料入館者２万人目は榊さん（茨城県）

２月９日、有料入館者２万人目を迎えました。

２万人目の入館者は、茨城県土浦市右籾町にお住まいの会社員榊　堅（さかき　かたし）さんでした。

榊さんは団体旅行で下部温泉を訪れ、夕方、友人２人と散歩がてら資料館に立ち寄られたところ、２万人目の入館者となりました。

榊さんには谷口館長から、額入りの金箔記念証、花束、オリジナルテレカなどが手渡されました。

「自分が記念入館者になるとは思ってもいませんでした。旅の思い出がひとつ増えました。」と喜んでくださった様子でした。

運営委員会委員研修を実施

資料館には、委員９人で構成する資料館運営委員会が設置されています。

この組織は、館長の求めに応じて、教育的事業の実施や展示計画策定等について館長に提言する、という任務を有しています。

当館は開館間もないため、他施設における組織、運営方法、企画展計画立案等の先進事例を学ぶため３月24日、25日の両日、運営委員会委員研修を実施しました。

今回訪問したのは、群馬県の岩宿文化資料館と栃木県の足尾銅山観光管理事務所の２施設でした。

岩宿文化資料館は、昭和21年に石器が発見され、昭和24年に遺跡の調査を実施し、昭和54年に国の史跡に指定された岩宿遺跡からの出土品の保存活用、学術文化の発信基地、地域に密着した施設を目指し、平成４年に開館したものです。

学芸員２人を配し、企画展、講座、体験学習、遺跡見学会、コンサートなど幅広い活動を展開していますが、なかでも、出張指導やサロンコンサートは興味深い活動で、このほか、友の会の自主サークル活動には目を見張るものがあります。

足尾銅山観光管理事務所は昭和55年に開館したもので、坑道、鋳銭座、資料館で構成されています。

トロッコによる坑内観覧のほか、銅山の歴史を資料、模型、鉱石を使って詳しく説明しています。

観光課に所属する施設であるものの、小学校の社会科の学習の一環としての利用が多いこと、売店についてはテナント方式を用いていること、活発に観光業者と対応していることなど、今後の館運営にあたり吸収するものが多い研修でした。

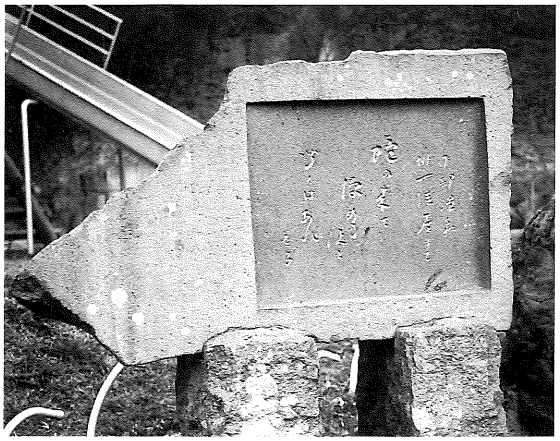
資料館の敷地内に高浜虚子の句碑移設

郷土の俳人　堤　俳一佳氏（故人）の御子息である堤　高嶺氏（甲府市在住）と裸子社から、上之平地内に建てられていた高浜虚子の句碑が町に寄贈され、３月30日に資料館敷地内に移設しました。

この句碑は、高浜虚子が昭和21年に本町を訪れ、雨河内川の畔で詠んだ「蛇の来て　涼める沢と　聞くはあれ」の句が刻まれているものです。

町内の文学碑は、この碑のほか、湯元ホテル玄関左側に、「裸子を　ひっさげ歩く　ゆの廊下」（高浜虚子）、下部ホテル玄関右側に、「この行や　花千本を　腹中に」（高浜虚子）、「春惜しむ　花も過ぎたる　山の湯に」（堤　俳一佳）、「百枚の　浴衣を干すも　花の中」（高野素十）、丸畑永寿庵境内に、「くさぎの花　さかりににほふ　微笑佛」（山口青邨）、町道古関丸畑線入口に、「村人に　微笑佛あり　ほととぎす」（秋元不死男）、三保公民館入口に、「春も稍　気色調ふ　月と梅」（松尾芭蕉）、源泉館入口に、「山越えて　入りし古駅の霧のおくに　電燈の見ゆ　人の声きこゆ」（若山牧水）、不二ホテルの庭に、三田村鳶魚終焉の地の碑があり、このように著名な文人墨客の碑が多く建てられている町は他に例を見ないでしょう。

このような風土から、俳句、短歌、川柳などを愛する人が多く、活発な創作活動が展開されています。



誌上博物館　－シリーズ その4－　鉱山用具②

金鉱脈を中心に採掘した鉱石を、搗く、磨る、挽くなどの方法で細かく粉砕して、鉱石中に含まれる金を単体とさせ、水のなかで比重選鉱を行い、金を採取するまでの一連の作業を粉成といいます。

露天掘りや坑道掘りによって採掘された鉱石は、作業所に運ばれ品位別に選別されます。鉱石の色や模様などを金山衆の管理のもと、熟練した人によって何種類にも分類したようです。それを焼き窯の中で焼き、熱収縮によって鉱石自体を脆くします。

石英質の多い鉱石はこれには不向きですが、少ないものはこの工程があることにより、後の作業がかなり楽になります。焼かれた鉱石は粗砕きの工程に移され、ここで、搗き石（2ページ写真参照）を使って鉱石を粗く砕いていきます。

これは脱穀と同じ方法で、杵を利用しており、それ程力を必要としないため、主に女性向きの作業であったようです。搗き石を受ける臼である搗き臼を地面に置き、その上に鉱石を置きます。

杵の先には搗き石が備え付けてあり、杵を足で踏んだり離したりを繰り返すことで杵が上下し、搗き石が鉱石をたたき砕いていきます。

粗砕きされた鉱石は次に磨り臼と磨り石（写真①）や挽き臼（写真②）を使って微粉化させていきます。

写真①

磨り臼は磨り面が皿状にくぼんだ板状、ないしは台状の臼で、上に粗砕きした鉱石をおいて水を加えながら、片手に持った、握りやすく、磨り合わせの良い磨り石で磨り潰していきます。

挽き臼は、上臼と下臼の二つで初めて機能します。上下の臼は、それぞれ中央部分に回転用の軸が設

写真②

けられており、上臼はその軸を受けて回転します。

上臼には、鉱石を供給する穴があいていて、そこから粗砕きされた鉱石と水を入れて回転させると、上臼の圧力と下臼との摩擦で鉱石が細かくなります。

特にこの挽き臼は特殊な仕組みを組み合わせています。それは、腰のあたりの高さまで台座を作り、そこに動かないように下臼を埋め込んであります。

挽かれた鉱石は、微粉化され泥状となり、臼から出てきて樋を伝い流れ、椀の中に落ちます。

椀には水路から流れてくる水が受けられており、その水流の力で泥は撹拌され、重い金は椀に残り、軽い鉱石の滓は椀から流れ出ます。その時に微細な金も椀から流れ出てしまうために、セリ板（資料館だより第2号5ページ掲載）を設け、流れ出た微細な金をこの板の格子目の溝に溜めます。

セリ板に溜まった微細な金は、次の「揺り分け」という工程に移されます。

椀やセリ板に溜った金は、水を湛えたフネ（資料館だより第2号5ページ掲載）の中で採取されます。

この時に使用されるのが「ユリ板」（資料館だより第2号5ページ掲載）という、若干波板状になっていて、なだらかにくぼんだ板です。この「ユリ板」の上面に金を含む鉱石粉をのせ、水の中で揺らしながら丹念に鉱石の滓だけを流し、比重の重い金だけを採取します。

このコーナーは、当館の展示資料のほか、金と鉱山に関する情報をシリーズで掲載していきます。

施　設　の　御　案　内　－その４－

ミュージアムショップ③

「お客様のニーズに応えられるものを」という販売理念に基づき、商品は幅広く取り揃えていますが、やっと、「ワインや地酒は無いんですか」という御要望にお応えできるようになりました。

税務署の許可をいただき、ワインと日本酒がショップに揃いました。いずれも、「山梨」という地方色豊かな品々で、特に金山資料館にふさわしい金箔入りのワインは好評をいただいております。

でも、お酒はそれぞれの好みに合った「味」が大切です。某テレビドラマの影響でワインをお買い求めになる方が圧倒的ですが、ワインは、赤、白、ロゼ、甘口、辛口など種類が豊富ですので、お買い求めになられるときは、まず味を確かめて納得してから。もちろん試飲ができますので、お気軽に声をかけてください。

旅の思い出とお酒に酔いながら、いい気分に浸ってみるのもまた一興。

資料館ノートから　－写真展の紹介－

町内在住者で組織している写真クラブ「下部写友会」の第２回作品展が、クラフトパークで開催されています。

当館では、この作品展終了後、写友会の協力により、富士山を題材にした力作約20点の作品をお借りし、開館一周年を記念した特別展を開催します。

資料館内の多目的ホールにおいて、５月17日まで開催しますので、ぜひとも御覧ください。

利用のご案内

◆開館時間
5月～10月　9:00➡18:00（受付は17:30迄）
11月～4月　9:00➡17:00（受付は16:30迄）

◆休館日
水曜日（祝日の場合はその翌日）
12月28日～翌年１月１日

◆入館料

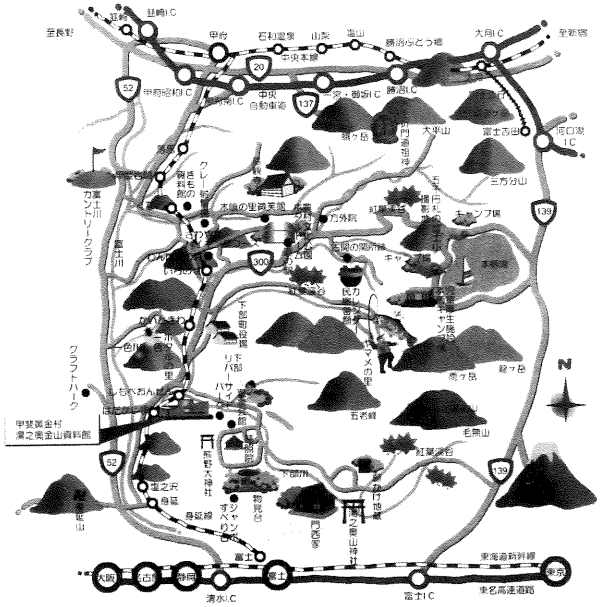
	大人	中学生	小学生	幼児
展示観覧	500円	400円	300円	無料
砂金採り体験	600円	500円	400円	400円
観覧・体験共通	1000円	800円	600円	400円

●20人以上の団体は10%引です。

交通のご案内

◆自動車をご利用の場合
・中央自動車道　甲府南Ｉ.Ｃ.から50分
　　河口湖Ｉ.Ｃ.から50分
・東名高速道路　富士Ｉ.Ｃ.から110分
　　清水Ｉ.Ｃ.から130分

◆電車をご利用の場合
・新宿駅・特急90分➡甲府駅・身延線特急40分➡下部温泉駅
・富士駅・身延線特急60分➡下部温泉駅



編集後記

資料館の裏山に冬山椒が自生していることに気付きました。また、野性の猿も棲んでいて、姿を見せることもしばしばです。

いよいよ万物躍動の春を迎えました。

過日、有料入館者２万人目を達成し、館としてもこれを弾みとしてさらに活気づいていきたいところ。

手探りの状態で過ごした開館からの１年。

そして、いよいよ試練の２年目。

職員一同、心新たに頑張りますので、よろしく御指導ください。

資料館だより　第４号　平成10年３月31日

発行　甲斐黄金村・湯之奥金山資料館
山梨県西八代郡下部町上之平1787番地先
ＴＥＬ　0556（36）0015